



財団法人 日本医薬情報センター (JAPIC)

JAPIC NEWS

No.287

2008

3

Contents

■ 巻頭言

「明治11年の日本を旅した英国人女性の旅行記を読んで」

ファイザー株式会社 顧問 島谷 克義 2

■ インフォメーション

「添付文書記載病名集」ver.2.0 2008年2月版発刊 4

「JAPIC日本の医薬品 構造式集2008」 発刊 4

「JAPIC医療用医薬品集 普及新版2008」 3月中旬発刊 5

■ トピックス

JAPIC-Qサービス ユーザ会を開催しました 5

院内採用医薬品集作成システム『JAPIC PIA』機能追加 6

平成19年度を振り返って 8

■ コラム

くすりの散歩道 No.10 新しいインターネット情報の流れ

(財)日本医薬情報センター 日野村 靖 10

■ シリーズ

東南アジアの医療事情(23) ベトナム[3]

ベトナムの鳥インフルエンザと保健省の取り組み

国立国際医療センター 国際医療協力局

IMCJ-ベトナム医療協力拠点センター長 小原 博 11

■ 図書館だよりNo.213 15

■ 情報提供一覧 15

明治11年の日本を旅した 英国人女性の旅行記を読んで

「日本奥地紀行」(イザベラ・バード著)平凡社ライブラリーより

ファイザー株式会社 顧問

島谷 克義(Shimatani Katsuyoshi)

JAPIC評議員



明治十一年(1878)といえば、維新により新しい政府が発足したものの日本は未だ混乱と不安の真只中にあり、日本で最大で最後の内乱といわれた西南戦争の余燼もさめやらぬ危険な政情であったに違いない。ましてや、英国ヨークシャーの牧師の娘として生まれた著者にとって日本なぞは地球の裏側の、彼女の信奉する西洋文明の光も届かぬまったくの未開拓地であつたらう。

この本は、幼いときに脊椎の病気に患った著者が健康の為に海外旅行をすすめられ、若い時にカナダ、米国などを旅行した後、47才になってこの未開の地日本をその年の6~9月の間旅行した時の紀行文の邦訳である。

文庫本で500頁にわたる長い紀行文であり、その内容を詳しく紹介する事は出来ないが、当時の日本の現実をこれ程詳細に観察し客観的に描写した書物に出会ったのは初めてであり、私にとっても新鮮な内容であつたので、是非その一端をご紹介してみたい。

著者は6月初旬に横浜に到着し、最も日本通だといわれた通訳のアーネスト・サトウやヘボン式ローマ字を作ったヘボン博士、ハリー・パークス公使等に会い、日本での旅へのアドバイスを受けている。

彼女の旅の目的は、できるだけ不便な未開の東北の奥地に入り、美しいと聞かされている日本のありのままの

自然と日本人の生活に触れ、最後はエゾ(北海道)にわたりアイヌ人に会う事であつた。

江戸(外国人はまだ東京をこう呼んでいた)を離れて当時流行していた人力車で日光に到着し、東照宮の美しさに感嘆しながら、金谷家(現在の日光金谷ホテル)に数日滞在する。

その後彼女は馬に乗り、鬼怒川沿いの山道を登りながら、いよいよ想像を絶するほど困難な日本奥地への2ヵ月の旅を開始する。山を越えて会津を通った後、一度新潟まで下りて日本海を見て、再び険しい山道に足を踏み入れる。米沢、山形を抜け秋田に入り、8月中旬に大館からやっと青森に至る。これらの行程はそれまでに西洋の婦人が誰も足を踏み入れた事がないであろうといわれた未踏の地であり、例年にない大雨の続いた年でもあり、旅は難渋を極めた。天候のおさまるのを待って、津軽海峡を渡り函館に着いてからの1ヵ月はエゾの地で未開の人とよばれていたアイヌ人との生活を満喫し、9月下旬にやっと船で横浜に帰港する。この紀行文を読んで不思議に思うのは、何が彼女をこの様に困難で苦しい旅に駆り立てたのかという事である。それ程までにこの旅行記は日本に対して客観的で冷静でクリティカルでさえある。晴れている時の日本の自然は緑におおわれ真に美しいが、雨と

風と流れの激しい川が彼女の旅をしばしば妨げる。彼女の見た日本人は、体は小さく肌は黄色で胸は凹み手足が短くちょこちょこ歩く。山村に行けば人々は不潔でほとんど裸であり、女性でさえ上半身をさらしたままである。宿は不衛生で、障子と呼ばれるティッシュペーパーで囲っただけの部屋であり、夜は常に蚤と蚊の大群と戦わなければならない。組み立て式ベッドと蚊帳が必需品であると述べている。行く先々の村で「外人が来た」と叫ばれ、夜となく昼となく人々が見物に来るためプライバシーも一切ない。著者にとっては苦痛の限りである。しかし一方で、日本人が常に礼儀正しく親切で丁寧であり、仕事に忠実である事に感心している。山中で落し物をした際に、女性の馬子が1里も戻って捜してきてくれた事に感謝しチップを渡そうとしたところ、「目的地まで安全にお送りするのが私の仕事です。」といって受け取らず立ち去ったという。また別の馬子は彼女が休息をとっている時に山の中に分け入ってわざわざ花を摘んでくれる。苦しみと喜び、辛さと楽しさを、未知な土地で発見し、体験するという事自体が旅の目的であり、彼女の冒険心を駆り立てる動機なのかもしれない。この未知の世界を探求するという意欲は、アングロサクソンの人々に特に強い様に思われる。

興味深いのは彼女の医療に対する知識である。病弱の為いろいろな薬を携行しており医学的な心得もある。この旅の途中でしばしば村の人々の病気を治療し感謝されている。会津の山奥では宿の主人の小さな子がひどい咳で苦しんでいたのもので、クロロダインを数滴飲ませたら苦しみが和らいだ。その話が翌日には村中に広がり皮膚病や眼病の人々が集まって来て治療を求めた。彼女は、

これらの病人をすべて治してあげる力がない事を悲しみ、持って来たなけなしの軟膏を数人に塗ってあげ、もっと清潔な生活をする様アドバイスしている。他の土地では、魚の骨が喉にささって苦しむ子供の母親の依頼で、毛糸の編み棒を使って骨を取り除いてやったところ、感謝した母親が山ほどのお菓子を持参し、樽を開いた病気の人々が隣の村からも押し寄せてくる。これらのエピソードは著者の科学的で冷静な判断と人々を愛する情熱を物語っている。

この紀行文で更に考えさせられるのは西洋人と日本人の共通点と相違点という事である。この本の内容は日本人にとって必ずしも心地良いものばかりではない。我々の気付かない多くの素晴らしい指摘もある一方、誤解や偏見だと思われる部分もある。そのギャップは当時の両国間の交流の浅さによるものだけではない様に思われる。それから60年以上も経った太平洋戦争の際に、日本という敵を分析し理解する為に米国の文化人類学者ルース・ベネディクトが書いた名著「菊と刀」を読む際にも同様な距離感を覚える。

しかし私はこれらの違いを悲観的に捉えている訳ではない。この紀行文は、異なった文化に育った人々が異なった考え方と見方をするのは当然であり、相手の考え方が異なるからといって排他的になるべきではなく、互いが違いを認めた上で、その違いを尊重し協力し合って、より良い社会を築くべきである事をあらためて教えてくれた1冊であった。その意味からも、アイヌに関する記述を字数の関係で取り上げられなかったのは残念である。

Information インフォメーション

医薬品の効能効果と
標準病名が対応する

「添付文書記載病名集」Ver.2.0 (2008年2月版) を発刊



オンライン請求のレセプト点検を支援します!

「添付文書記載病名集」Ver.2.0を2008年2月下旬に発刊しました。本書は医療用医薬品添付文書の「効能効果」に対応する標準病名を商品名ごとに一覧としてまとめた実践対応書です。「医薬品の効能効果」(適応症)をICD-10の標準病名に対応させ、さらに临床上使用される詳細な病名に対応しています。また、医薬品適正使用の観点から用法用量、警告、禁忌などの添付文書記載情報の重要事項の一部を掲載しました。

■ 特長

- ・ 対応する標準病名を大幅に見直し、医療用医薬品14,000品目(漢方製剤を除く)の効能効果に対応する約6,800標準病名を掲載しています。
- ・ Ver.2.0ではJAPICがこれまでに蓄積した文献情報や学会発表で使用された病名を加え、また、ICD10の同一分類の中から選んだ病名を臨床医師・薬剤師に評価していただき対応する標準病名を大幅に拡張しランク付けをしました。
- ・ 内用薬、注射薬、外用薬(歯科用薬を含む)の商品名を掲載しました。
- ・ それぞれの商品がもつ効能効果と標準病名を記載し、該当する添付文書の用法用量の他、重要事項(警告・禁忌・原則禁忌・併用禁忌・原則併用禁忌)の一部を掲載しました。
- ・ 掲載した商品名はJAPIC「医療用医薬品集」記載の基本添付文書を参考とし、その他の商品は効能効果や規格単位が同等な商品を後段に列挙しました。
- ・ 2007年6月までにJAPICで入手した添付文書および2007年7月薬価収載分の添付文書をもとに作成しています。
- ・ 付録として、2007年8月から12月に薬価収載された医療用医薬品の新薬で新規成分の情報を掲載しています。

■ 価格

7,800円(税込) B5判/約1,500ページ

「JAPIC日本の医薬品 構造式集2008」(検索CD-ROM付き) 発刊!



類書なき書籍としてご好評頂いている『JAPIC日本の医薬品 構造式集』の2008年版を3月中旬に発刊いたします。

医薬品にとって構造式はきわめて多くの情報を内蔵しその本質を示す真髄といえます。構造式には、安定性、融解性などの物理化学的特性はもとより、薬効薬理まで示唆されております。また、容易に類似化合物の類推ができ、製造や合成の難易度までも予測できます。このような重要な情報を含む構造式を調べようとすると今のところは案外手間がかかります。本書は薬剤師、研究者、薬学系大学生などの皆様にとっては非常に有用な資料であると考えます。

また付録の検索CD-ROMは利便性の高いものとしてご好評をいただいております。本書の詳細は次のとおりです。

■ 内容

国内で販売されている医療用医薬品のうち、一部の高分子製剤、低分子製剤などを除く約1,300成分の構造式を収載。各成分には構造式のほか、一般名・化学名・薬効分類・適応・CAS Registry number・分子量・分子式を記載。

■ 索引

有効成分及び製品名の五十音索引と欧文索引の2種類を収録。

■ CD-ROM

より詳細な情報を収載した検索CD-ROMを付録として添付。複数の薬剤の構造式を同時に1画面に表示することができ、同一薬効群や類似作用をもつ医薬品などの構造式の違いを比較検証することが可能。

■ 価格

2,940円(税込) B5判/約200ページ

より身近に！
使いやすく お求めやすい 「JAPIC医療用医薬品集 普及新版2008」 3月中旬発刊

“JAPIC医療用医薬品集2008”をいつもご利用頂きありがとうございます。

製品の網羅性はそのままだ、医療用医薬品の使用上の注意を中心に絞り込んだ濃縮版とも言える“JAPIC医療用医薬品集 普及新版2008”を3月中旬に発刊いたします。

本書は従来の網羅性に主眼を置いた紙面構成故の厚みと重さの不便を解消し、日々刷新される医薬品情報に対応するための追補の意味も含めた書籍となっております。

2008年1月時点の最新医療用医薬品添付文書情報（約17,000製品）を網羅し、剤形・製品ごとの承認事項の違いに対応した記載を行っております。

より使いやすく、よりお求めやすく、“JAPIC医療用医薬品集2008”の収録製品数はそのままに普及新版ではページ数を半分まで絞り込み、価格も7,875円（税込）といたしました。

是非この機会に“JAPIC医療用医薬品集 普及新版2008”をご購入いただき、最新の添付文書情報を有効に活用していただけますようお願いしております。

T TOPICS

JAPIC-Qサービス ユーザ会を開催しました

19年度のJAPIC-Qサービス ユーザ会を1月28日（月）に日本薬学会長井記念ホールにて開催し、85名のユーザの方々にご参加頂きました。

JAPICからは本年度のQサービス提供実績の報告を行い、来年度のサービス改良点及び更新手続き方法について説明しました。続いて今年度から新たに提供を始めたJAPIC-QXサービスについてご案内しました。

Qサービス提供開始までの経緯に触れながら、企業の人手と時間の節約のために誕生したJAPIC-QXサービスの具体的な提供例を交えてご紹介しました。

また、今回は講演を2題企画し、医薬品医療機器総合機構安全部医薬品安全課担当官 門脇 京子先生からは「医薬品安全課の業務」について、エーザイ株式会社 高橋 春男先生からは「PMSの歴史 — 安全性情報の取り扱いを中心に—」についてご講演頂きました。それぞれ各企業の安全性情報担当の業務に密接した内容で、皆様にご好評頂きました。

ユーザ会終了後は懇親会を行い、こちらも多数の方々にご参加頂き交流をはかることができました。

プログラム

15:05～15:40 -----

● 講演1: 医薬品安全課の業務

独立行政法人医薬品医療機器総合機構 門脇 京子 先生

15:15～16:30 -----

● 19年度のQサービス提供報告・20年度からの改善点・更新手続き等

● JAPIC-QX (JAPIC-Q extra) サービス・質疑応答

16:45～17:30 -----

● 講演2: PMSの歴史—安全性情報の取り扱いを中心に

エーザイ株式会社 高橋 春男 先生

トピックス TOPICS

■ 院内採用医薬品集作成システム『JAPIC PIA』機能追加！ 〈後発品（ジェネリック医薬品）管理機能追加〉

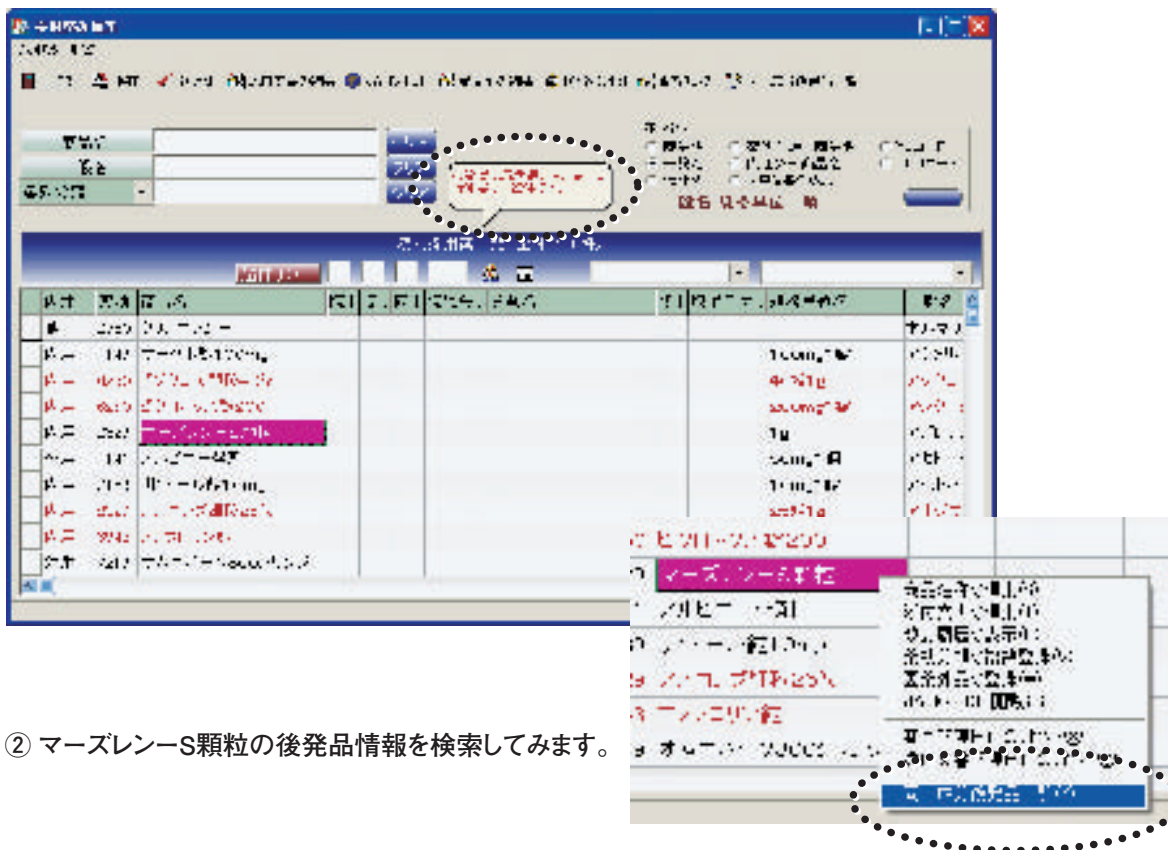
この度、お客様からご要望の多かった、後発品（ジェネリック医薬品）管理機能を追加しました。本号では今回追加した主な機能についてご紹介します。

JAPIC PIAは、病院内で院内医薬品集を作成する際に、低コストで、「Microsoft Office Word」で簡単に作成できることを目的としたシステムです。添付文書の多頻度改訂などで、院内医薬品集はあるものの、改訂に間に合わない、また、印刷業者への高額な支払いは難しい等のお悩みの医療機関の皆様にも最適です。

添付文書情報データは、当センター添付文書情報iyakuSeachと直リンクしているので、最新の添付文書イメージPDFを閲覧することができ、添付文書改訂情報や、新規採用薬の全文データを簡単にダウンロードすることが可能です。

1 後発品マーク表示が、医薬品集、採用薬一覧、Webページ等、全ての出力に表示されます。

① 採用薬の編集画面で、後発品は赤色表示されます。



② マーズレン-S顆粒の後発品情報を検索してみます。

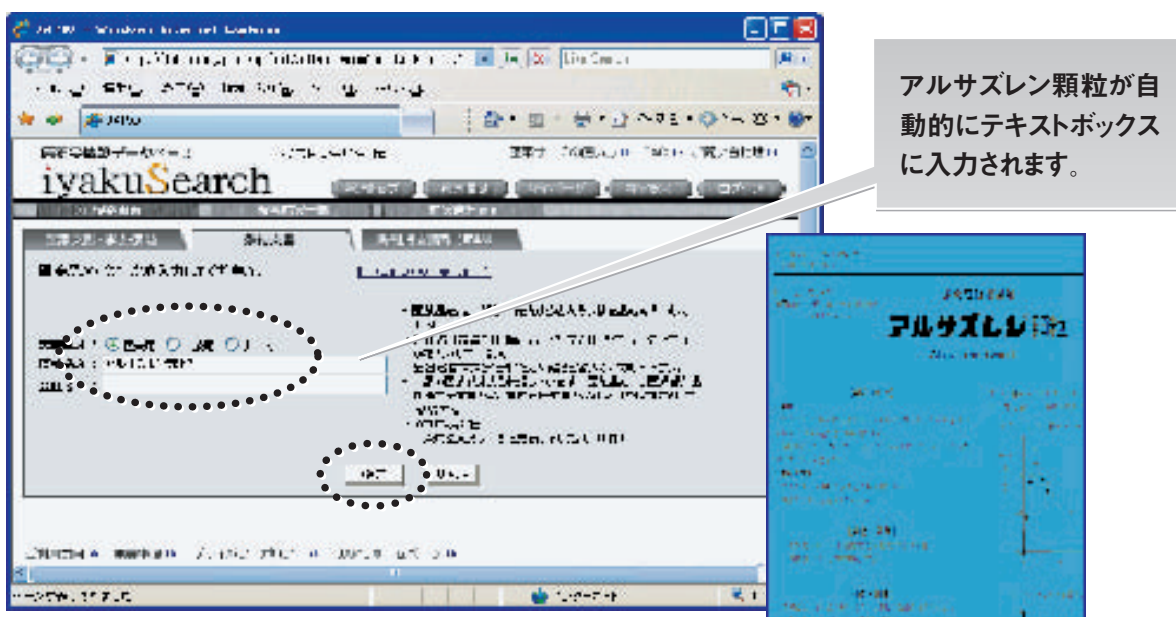
2 | 同一成分後発品一覧が表示されます。後発品の薬価比較が可能です。



クリックすると、
iyakuSerachが
立ち上がります。

③ さらに後発品情報のもう少し詳しい情報をインターネットを使用して、検索します。

3 | JAPIC iyakuSeach 添付文書PDFより後発品の適応症確認ができます。



アルサズレン顆粒が自
動的にテキストボックス
に入力されます。

■ 問合せ先(資料請求) 事務局 業務・渉外 TEL 0120-181-276 FAX 0120-181-461

■ 平成19年度を振り返って

◆はじめに

日本の医薬品市場規模は、わずかずつではあるが伸びているものの世界全体の中での占める割合は低下している。これは、今の日本全体に通ずるものであり、日本の存在感や注目度がしだいに希薄となってきているのが心配である。

このような状況の中、過去の例にならい本年4月からは薬価の引き下げが実施され、製薬業界を巡る環境は相変わらず厳しい状況にあるが、日本発の新薬が生まれ日本に元気と希望を与えて欲しいものである。さて、新年度まで1か月弱となったが当財団(JAPIC)における平成19年度の事業実績を振り返ってみたい。

◆主な事業等について

まず、添付文書関連情報であるが、JAPICの看板ともいえる“赤ジャビ”と“青ジャビ”すなわち医療用医薬品集と一般用医薬品集であるが、『**医療用医薬品集2008**』は、JAPICが独自で編集から発行・普及まで行うようになってから第3版となった。公益法人の使命として“より良いものを安く、より多くの方に利用していただきたい”というスローガンの下、数年前の半分以上の価格としながらも質と量を向上させた。

『**一般用医薬品集**』も全ページカラーにするなど、見やすくしつつ医療用と同様に大幅な価格の値下げを行った。両方ともお客様からは好評をいただいているが、販売数量からみると十分な成果とはいえない状況である。IT化の時代にあって書籍離れは確実に進展しているようだ。しかしながら、重要情報には間違いないので、付加価値や利便性を高めればチャンスはあるかと思う。

今後、JAPICが注力していくものが、『**添付文書記載病名集**』の普及である。これは医薬品の効能効果に対応する標準病名を関連付けた商品であり先月にVer.2.0を刊行した。今般の改訂版は、JAPICがこれまでに蓄積した文献情報や学会発表で使用された病名を加え、またICD10の同一分類の中から選んだ病名を臨床医師・薬剤師に評価をしていただき、対応する標準病名を大幅に拡張しランク付けをしたものである。

医薬品の適切な選択、有効性・安全性の確保、レセプトにおける病名の記載漏れ防止にも役立つものと考えている。

同時に、関心が高まり引き合いが増えているのが、これらの電子データ版の『**添付文書記載病名データ**』と『**医療用医薬品添付文書情報データ**』である。医療機関においては、明細付きの領収書の発行やレセプトの電子請求など国の方針もあり急速に電子化が進んでいる。電子カルテやオーダーリングシステム等にこのデータを導入していただければ、標準病名に加え慣用病名も網羅しており、医師にとってカルテへの標準病名記載に便利であり、かつ最新の添付文書情報も確認できるので、医療機関等に是非とも普及を図りたい。

次に、文献・学会関連情報であるが、製薬企業の多数の皆様にご利用いただいている『**医薬文献・学会情報速報サービス、略してQサービス**』はJAPICの大黒柱である。国内約400の医学薬学雑誌および年間延べ4,600学会の予稿集等に目を通し、採択をしているが膨大な情報量である。

今年度から基本料金を下げ減収となったが新たな利用者もあり、目標に近い数字を残せた。提供の内容で、

これまで画像が不鮮明であったりしたが、システムの改良や機器の更新により本年4月には鮮明な画像が提供できる見通しである。

また、本年度から個別の要望にも応える『QXサービス』を開始した。例えば、情報量が多いので多い情報の中から重要なところにマーカーを付けたり、キーワードを追加したりして利用される側の便宜を図った。どのような要望についても前向きに検討するので申し付けていただきたい。

海外情報関連では、『外国政府等の医薬品・医療機器の安全性に関する措置情報、略してJDM』が中心である。このサービスは、米、英、独、豪、加、スウェーデン、EU、WHOそれに日本がインターネットで発信する規制情報を毎日、分析・整理し提供しているものである。中味とスピードが勝負であり、JAPICの存在意義にもつながる事業と捉えている。利用者数は微増であるが、お客様からの問合せには無料トライアルにより評価をいただいている。

安全性の確保はますます重要性が高まっており、いち早く海外の情報がわかる便利なものである。

さて、これまで記述した大部分の情報をJAPICのホームページからデータベースとして提供しているのが『iyakuSearch』である。これだけの内容が誰でも無料(一部有料)で検索できる。会員の方でまだ利用されていない方は是非ご覧いただきたい。

この他、開発研究の支援として、平成10年以降医薬品医療機器総合機構が公表する審査報告書をまとめたものが『日本の新薬』である。今年度5巻を追加発行し、全25巻の大作となった。また、『臨床試験情報』の登録・公開をしているが確実に増えている。また、『ユーザ会』『薬事研究会』『医薬情報講座』などを開催し、医薬品情報に関連した教育研修の場を提供している。

JAPICを支援していただいている**会員数**については大手同士の合併にもみられるよう業界再編が進んでおり減少する要因もあるが、若干ではあるが新規加入の企業もある。また、2年目となったG会員(診療所、薬局対象)も着実に増えており感謝している。

◆おわりに

こうした事業活動等の結果としての決算状況は、皆様のご支援を得て今年度も収入が上回る見通しであるが収支の改善には引き続き努力したい。今後に向けては、JAPICもスクラップアンドビルドを強化し、捨てる勇気と新たな事業の構築に全力を傾けてまいりたい。会員の皆様の引き続いてのご支援、ご指導をお願いします。

(理事・事務局長 持田 秀男)

新しいインターネット情報の流れ — インターネットを散歩する —

(財) 日本医薬情報センター 医薬文献情報担当 日野村 靖

《BlogとYouTube》

Windows95が発売されてから13年、つまりインターネットも普及し始めてから13年経ちますが、当初HTMLだけであった情報から、画像、映像情報へ、そして、双方のコミュニケーションが図られる掲示板やBlogなどのコンテンツも増加してきました。最近では、映像配信サービスであるYouTubeが米Google傘下に入り、多くの映像コンテンツが提供されるとともにコミュニケーションも増えてきています。

これらBlogやYouTubeのコンテンツの中には、専門家や、きちんとした組織による発信情報も少なくありません。

国立医薬品食品衛生研究所の主任研究員である畝山智香子氏の「食品安全情報blog」(<http://d.hatena.ne.jp/une-yama/>)では、食品を中心としています。健康食品や、医薬品などの話題も取り上げ、ソースを開示して情報提供しています。また鹿児島県の開業医である牧瀬洋一氏の「内科開業医のお勉強日記」(<http://intmed.exblog.jp/>)では、重要な医学論文を読み砕いて紹介しています。オーソライズされたウェブサイトより、これらBlogの方が、しぼりの無い情報発信ができる場合もあるのかもしれません。

また、YouTubeでは、米FDAによる患者向けの医薬品情報の提供が行われています。(<http://jp.YouTube.com/user/USFoodandDrugAdmin>)。また、その他医薬品に関連したもののだけでも、様々な紹介映像が公開されて

おり、医師向けの教育用コンテンツも配信されています。ただ、残念なことにまだ日本語で提供されるコンテンツは少ないようです。医学・薬学関係ではありませんがカリフォルニア大学バークレー校の授業が公開されるなど(<http://www.youtube.com/ucberkeley>)あらたな流れがあり、ウェブ上のコンテンツに映像がどんどんと盛り込まれるような時代になるかもしれません。

《医学コンテンツのビジネス》

米Microsoftが、2007年10月4日に、個人の健康状態や疾病などの情報(Personal Health Record)を保存するための無料ソフトウェア／サービス・プラットフォーム「Microsoft HealthVault」と、健康／医療情報に特化した検索機能「HealthVault Search」(<http://www.healthvault.com/>)を発表しました。

前者は医療情報を個人で保管するという考え方に基づいたものであり、まだ開始したばかりなので現在日本への影響はありませんが、今後の展開に注目する必要があるかもしれません。また、後者の「HealthVault Search」を使用してみたところ、漠然としたクエリーの場合は、意外と正しい回答をしてくれるという感想を持ちました。「Google Scholar」とは趣旨も違いますが、医学分野では競合するかもしれません。当然競争相手であるGoogleの方も黙っていないでしょうから、これから、この分野での新たなサービス合戦が急速に展開されるのかもしれません。



～東南アジアの医療事情 (23)～



ベトナム [3]

ベトナムの鳥インフルエンザと保健省の取り組み

国立国際医療センター国際医療協力局
(IMCJ-ベトナム医療協力拠点センター長)
小原 博 (Ohara Hiroshi)



はじめに

高病原性鳥インフルエンザ(H5N1)の流行とそれに起因する新型インフルエンザ発生の可能性が世界中を恐怖に落とし入れています。鳥の間に大きな被害が出ているだけでなく、ヒト症例も2008年2月5日現在、世界14か国から369例(226例死亡)が報告されており、さらに増加しつつあります。ベトナムは2003年4月における世界に先駆けたSARS制圧から間もない頃、2003年末から再び新興感染症である鳥インフルエンザの流行に直面しました。患者数は増え続け、2005年末におけるヒト症例数は93例で、これは当時世界で最も多い数でした。ベトナム保健省は流行当初より積極的な対策に取り組み、2005年11月以降17ヶ月間ヒト症例が皆無であったなど、良好な成績を示しました。

1. ベトナムにおける鳥インフルエンザ

ベトナムでは2003年末に高病原性鳥インフルエンザ(H5N1)が初めて出現し、その後現在(2008年2月)までに鳥の間に4波の大きな流行がありました。第1波(2003年12月～2004年2月)、第2波(2005年1～3月)、第3波(2006年12月～2007年2月)の流行は冬季に起きましたが、第4波(2007年5月～8月)は夏季に起きました。流行時には人々を恐怖に落とし入れただけでなく、大量の家禽が死亡または殺処分され、農業、社会、経済面で大きな影響が出ました。

ヒトの症例は2008年2月8日までに102例発生し、48

例死亡しています。最初の症例が発生したのは2003年12月26日でした。その後、2005年11月14日までに32省で93例発生し、42例が死亡しました。

それから暫くの間ヒト症例の発生はなく、国内では次第に安堵感が漂うようになりました。12月以降は鳥の間でも発生がなくなり、この頃はベトナムにおける対策は極めて効果的であったと国際社会からも高い評価を受けていました。一方この間、世界各地では鳥インフルエンザの流行が拡大し、ヒト症例数も増加し続けていました。

2005年11月以降、ベトナムでは長らくヒト症例は皆無でしたが、2007年5月に17ヶ月ぶりに北部のビンフック省でヒト症例が発生したのを発端に、8月までに合計7例が相次いで発生し、ベトナム国民の間で再び不安と緊張感が蔓延しました(ヒト症例再発に先立って、鳥の間で流行が起き始めました。この流行は、一旦は制圧されたかに思いましたが、後に再燃が起こりました)。8月中旬からヒト症例発生は途絶えていましたが、12月に1例、2008年1月に1例発生しています(いずれも北部)。現在、WHO分類でフェーズ 3の段階にありますが(ヒト-ヒト感染は無い、あっても僅か)、新型インフルエンザ発生の可能性が高まっているのは事実です。

ヒト症例は2003年～2004年の頃は南部を中心に発生し、小児例が多かったのが特徴でした。しかし、2004年末頃から、北部でも多くの患者が発生するようになりました。当初に比べ軽症例および中高年の罹患者が増加している傾向があります。感染ルートに関する調査結果では、大多数の症例は感染鳥との接触歴があ

りました。家族内集積例が数例認められていますが、ヒトヒト感染は証明されていません。

2.鳥インフルエンザに対する ベトナム保健省の取り組み

ベトナム政府は鳥インフルエンザ対策国家指導委員会を設置して対策に取り組んできました。委員会は首相を筆頭とし、保健省と農業農村開発省が主体となり、それに関連省庁が参加する形で構成されています。保健省内にも大臣を筆頭とする対策委員会が設置され、委員会の活動方針に沿って関係各省との連携や外国ドナーとの協力が行われています。保健省において実施された主な対策を表1に示します。

No.	対策の概要
1	対策委員会設置
2	民衆の疾患に対する認識高揚
3	サーベイランス体制強化
4	早期発見、適切な初動体制構築
5	医療スタッフの能力向上
6	検査、治療、感染対策機材の整備
7	治療薬（タミフル、抗生物質）の備蓄
8	最新情報の開示
9	農業農村開発省など他セクターとの協調
10	国際協力の推進
11	予防、疫学に関する研究体制構築
12	各ステージに沿った行動計画作成
13	緊急対策チーム結成

表1 ベトナム保健省における鳥インフルエンザ対策

大流行が発生した際の対応策として、“鳥およびヒトインフルエンザ流行時における国家総合活動計画”と“鳥インフルエンザ対策の概要”が作成されました。さらに、サーベイランス能力、診療体制、住民に対する啓発、正確な情報伝達を強化する方針を打ち出しました。2005年初頭には病院を対象とした“鳥インフルエンザ診療指針”を作成して各病院に配布しました(写真1)。



写真1 鳥インフルエンザ緊急対策チーム

鳥インフルエンザに由来する新型インフルエンザの発生が常に危惧されており、その際には1918年のスペイン風邪に比するような大流行が起こり、多くの犠牲者が発生することが予想されています。保健省はバックマイ病院、国立熱帯病感染症研究所、国立小児病院（以上ハanoi市）、フエ中央病院（フエ市）、チョーライ病院、ホーチミン市立熱帯病病院（以上ホーチミン市）を重点病院として位置づけ、これらの病院における診療体制の整備に努めています。さらに地方病院における診療能力や院内感染対策能力の向上、全国レベルにおけるサーベイランス能力やウイルス学的検査能力強化を実行しつつあります。

2005年11月までに発生したヒト鳥インフルエンザ症例93例中、43例は日本との協力が実施されているバックマイ病院で診療が行われました。43例中死亡は8例にとどまっており（死亡率18.6%）、同病院の死亡率はベトナムの他の病院や外国の例に比し有意に低い数値でした（この時点における全世界の死亡率は約60%）（写真2）。

2005年末以降、ヒト症例も鳥症例も発生しない状態がしばらく続き、一時は制圧に成功したかに思えました。この頃、ベトナム保健省は対策実施から得られた教訓を以下のように述べています：「鳥インフルエンザ対策上重要なことは、政府の積極的な介入、対策委員会の



写真2 鳥インフルエンザ患者の診療（保健省提供）

効果的な活動、正確な情報開示、関連省庁や外国援助機関との協調、疾患に関する正しい理解や予防法を国民へ啓発することである。鳥インフルエンザ対策を効果的に進めるにあたり、SARS対策の経験が役立った。中央レベルから末端レベルまで構築されたヘルスシステムも予防対策、サーベイランス、疾患の早期発見を実施する上で有益であった。」

3.保健省-農業農村開発省間の協調

鳥インフルエンザ対策に当たって、保健省-農業農村開発省間の会議が頻繁に開催されるなど、両省の協力が実施されていることを強調したいと思います。農業農村開発省で実施された主な対策は以下のとおりです。これらは流行状況により強化されたり緩和されたりしています：①発生地点周辺の家禽殺処分、②流行地域から家禽の移動禁止、③家禽飼育区域の消毒、④検疫体制の強化、⑤都市内における家禽飼育の禁止、⑥アヒル、カモ等の放し飼い・孵化の禁止、⑦家禽に対するワクチン接種、⑧検査施設、検査要員の能力向上、

⑨鳥類における鳥インフルエンザウイルス感染状況に関するサーベイランスシステム構築、⑩家禽飼育・賭殺・加工・消費過程の改善。

農業農村開発省における対策の中で特徴的なものとして、鳥に対するワクチン接種が挙げられます。2005年8月、疾患の流行拡大に基づき、政府は鳥インフルエンザ対策措置としてワクチンを使用する決定を行いました。2005年8月初旬にまず北部のナムディン省と南部のティエンザン省で試験的予防接種が

開始されました。その後接種対象省を広げ、2007年末までにすべての省で1億5000万匹以上にワクチン接種が行われました。ワクチン接種群と非接種群では明確な有意差が認められ、同省は接種が有効であったと評価しています。ワクチン接種に伴う悪影響は今のところ確認されていません。

4.鳥インフルエンザ対策における日本政府の協力

現在、ベトナムにおいて鳥インフルエンザ対策の中核医療機関として国立衛生疫学研究所（サーベイランス、ウイルス学的検査、研究）とバックマイ病院、国立感染症熱帯病研究所（診断、治療、医療従事者の訓練）を挙げることができます。国立感染症熱帯病研究所は2006年にバックマイ病院から分離し、保健省直轄の医療機関となりました。これらの医療機関に対し日本政府は無償資金協力と技術協力を実施してきました。

バックマイ病院に対する協力は1990年代の初頭に遡り、病棟建築、機材供与、各分野における医療技術



の指導などを実施してきました。現在も救急、トータルケア、院内感染対策、小児科、地方病院の指導を重点協力分野としており、これらの技術は新型インフルエンザ患者が発生したときにも極めて有益であると考えられます。国立衛生疫学研究所に対しては、鳥インフルエンザ等危険病原体を扱える施設（P3施設など）建設と安全管理の技術指導が行われています。

そのほか、治療薬であるタミフルの供与、新型インフルエンザを想定した院内感染対策研修（新型インフルエンザ発生の際にはSARS流行時のように院内感染が多発することが予想されます）、近隣諸国の医療従事者を対象とした新型インフルエンザ対策研修、などを実施して対策に協力しています。

日本政府の協力は保健省の政策に基づいてそれを支援する形で企画・実施されています。2004年から2007年まで保健省アドバイザーとして勤務していた筆者は、ベトナム保健省における対策にも参画しましたが、日本の援助の立場からも企画や研修会実施などに協力しました。

おわりに

ベトナム保健省が実施した鳥インフルエンザ対策の中には、他の国々にとっても有益なものが多分にあります。SARS対策の経験や教訓が生かされていることも大変嬉しいことです。けれども最近、ベトナムでは再び症例が発生し始めており、保健省は一層の警戒を強めています。

ベトナムは現在テト（旧正月）の最中です。テト中はヒトの移動が激しくなる、鶏肉を食べる習慣がある、鶏肉等の密輸が増える、気が緩むなどの理由で、鳥インフルエンザが再燃しやすい時期と言われています。新型インフルエンザ発生の可能性を危惧する一方、人々は平和なテトを楽しんでいます（写真3）。

（完）



写真3 テト前の市場（ハノイ市）

【新着資料案内 平成20年1月10日～平成20年2月6日受け入れ】

図書館で受け入れた書籍をご紹介します。この情報は附属図書館の蔵書検索 (<http://www.libblabo.jp/japic/home32.stm>) の図書新着案内でもご覧頂けます。これらの書籍をご購入される場合は、直接出版社へお問い合わせください。
閲覧をご希望の場合は、JAPIC附属図書館 (TEL 03-5466-1827) までお越し下さい。

＜配列は書名のアルファベット順＞

書 名	出版社名	出版年月	ページ	定 価
Annual Health Bulletin 2007 A Window to Health Sector Performance 著者名/Royal Government of Bhutan Ministry of Health	Ministry of Health	2007年	167p	
Bhutan Essential Drugs List 2005 著者名/Ministry of Health	Ministry of Health	2005年	17p	
ビッグ・ファーマ 製薬会社の真実 著者名/マーシャ・エンジェル著、栗原千絵子 他監訳	篠原出版新社	2005年11月	336p	¥2,415
治療薬・治療指針ポケットマニュアル2008 著者名/小谷和彦、朝井靖彦 編	羊土社	2008年2月	846p	¥4,515
治療薬ハンドブック 薬剤選択と処方のポイント 2008 著者名/高久史郎、堀 正二	じほう	2008年1月	1,554p	¥4,410
治療薬マニュアル 2008 著者名/北原 光夫 他編	医学書院	2008年2月	2,464p	¥5,250
Data Book 2008 著者名/日本製薬工業協会 広報委員会 編	医薬出版センター	2008年1月	94p	
Drug Information in Korea 2006 著者名/Korea Pharmaceutical Information Foundation	Korea Pharmaceutical Information Foundation	2006年3月	884p	
ED診療ガイドライン 著者名/日本性機能学会ED診療ガイドライン作成委員会 編	ブラックウェルパブリッシング(株)	2008年1月	42p	¥1,575
ファーマシューティカルケア・ファーストステップ 著者名/高久 史郎 他監修	ライフメディコム	2007年9月	352p	¥4,500
医薬品コードブック 2007 著者名/中和印刷 編	中和印刷	2007年9月	678p	
医薬品承認申請ガイドブック 2007 著者名/日本薬剤師研修センター 編	薬事日報社	2007年12月	466p	¥4,410
今日の治療指針 2008年版 (Volume 50) 私はこう治療している 著者名/山口 徹 他総編集	医学書院	2008年1月	1,896p	¥19,950
今日の治療薬 解説と便覧2008 著者名/水島 裕 編	南江堂	2008年2月	1,374p	¥4,830
広辞苑 第六版 普通版 著者名/新村 出 編	岩波書店	2008年1月	3,074p	¥7,875
厚生行政関係 公益法人要覧 平成20年版	国政情報センター	2008年1月	587p	¥7,140
宮崎大学医学部附属病院 医薬品集 第11版 著者名/宮崎大学医学部附属病院薬事委員会 編	宮崎大学医学部附属病院薬事委員会	2008年1月	921p	
Monograph on Medicinal Plants of Bhutan Volume1 2006 著者名/Institute of Traditional Medicine Services Ministry of Health	Ministry of Health	2006年	75p	
生物学的製剤基準・解説編 2007年版 著者名/渡邊治雄 編	じほう	2007年12月	33p	¥9,450
食品添加物公定書 第8版 著者名/日本食品添加物協会	日本食品添加物協会	2007年8月	800p	¥25,000
The Medicines Act of The Kingdom of Bhutan 2003		2003年	25p	
図書館情報学用語辞典 第3版 著者名/日本図書館情報学会用語辞典編集委員会 編	丸善	2007年12月	232p	¥3,990
Traditional Medicine Formulary of Bhutan Second Edition	Ministry of Health	2007年	141p	



情報提供一覧

【平成20年2月1日～2月29日提供】出版物がお手許に届いていない場合、宛先変更の場合は当センター事務局 業務・渉外担当 (TEL 03-5466-1812) までお知らせ下さい。

情報提供一覧	発行日等
＜出版物等＞	
1.「医薬関連情報」2月号	2月29日
2.「添付文書入手一覧」2008年2月分 (HP掲載)	2月29日
3.「JAPIC NEWS」No.287	2月29日
4.JAPIC「医療用医薬品集」2008更新情報2008年2月版	毎月末日
5.「添付文書記載病名集」Ver.2.0 (2008年2月版)	2月22日
＜速報サービス等＞… FAX、郵送、電子メール等で提供	
1.「医薬関連情報 速報FAXサービス」No.622—625	毎 週
2.「医薬文献・学会情報速報サービス (JAPIC-Qサービス)」	毎 週
3.「JAPIC-Q Plusサービス」	毎月第一水曜日
4.「外国政府等の医薬品・医療用具の安全性に関する 措置情報サービス (JAPIC Daily Mail)」No.1640—1659	毎 日
5. JAPIC Weekly News No.142—145	毎週木曜日
6.「感染症情報 (JAPIC Daily Mail Plus)」No.227—230	毎週月曜日
7.「PubMed代行検索サービス」	毎月第一・三水曜日
8.JAPIC「医療用医薬品集」2008更新情報2008年1月版	毎月10日
9.「Regulations View Web版」No.150	2月29日

データベース一覧	更新日
＜iyakuSearch＞ http://database.japic.or.jp/	
1.医薬文献情報	月 1 回
2.学会演題情報	月 1 回
3.医療用医薬品添付文書情報	月 2 回
4.一般用医薬品添付文書情報	月 1 回
5.規制措置情報	毎 日
6.臨床試験情報	随 時
7.日本の新薬	随 時
8.学会開催情報	月 2 回
＜JIP e-InfoStreamから提供＞ https://e-infostream.com/	
1.「JAPICDOC速報版 (日本医薬文献抄録速報版)」	月 1 回
2.「JAPICDOC (日本医薬文献抄録)」	月 1 回
3.「ADVISE (医薬品副作用文献情報)」	月 1 回
4.「MMPAN (学会開催予定)」	月 1 回
5.「SOCIE (医薬関連学会演題情報)」	月 1 回
6.「NewPINS (添付文書情報)」(月2回更新)	月 2 回
7.「SHOUNIN (承認品目情報)」	月 1 回
＜JST JDream IIから提供＞ http://pr.jst.go.jp/jdream2/	
「JAPICDOC (日本医薬文献抄録)」	月 1 回



医療現場における副作用の早期発見、早期対応のために

重篤副作用 疾患別対応マニュアル 第1集

厚生労働省の重篤副作用疾患総合対策事業として、平成17年度から4年間の計画で作成される「重篤副作用疾患別対応マニュアル」の第1集です。

厚生労働省、医薬品医療機器総合機構のホームページに2006年11月公開の9マニュアル、2007年6月公開の10マニュアルをまとめて見やすい書籍版として発刊!!

今後もマニュアルが公表される度に発刊予定!!

発行 (財)日本医薬情報センター (JAPIC)
発行協力 (社)日本病院薬剤師会

B5判 約400ページ

ISBN:978-4-903449-35-7

お申込先 ☎ TEL 0120-181-276 (税・送料込)

1,680円

ガーデン

このコーナーは薬用植物や身近な植物についてのヒトクチメモです。
リフレッシュどうぞ!!



ウメザキウツギの別名もあるが空木とは異なり、梅と同じバラ科の外来種で、最近人気が出て、庭園に植える人が増えた。利休の梅というだけあって鎌倉の寺に似合う花の一つで、いくつかの古刹の境内で咲き誇っている。但し、大言海に依れば、利休には「昔、京阪地方にて遊女の巧者なるものの称」という意味もある。(ky)

りきゅうばい

JAPIC ホームページより
<http://www.japic.or.jp/>

HOME

サービスの紹介

ガーデン